

女たちの同時代 北米黒人女性作家選⑤

メリディアン

アリス・ウォーカー 高橋茅香子訳



女たちの同時代 北米黒人女性作家選⑤

メリディアン

アリス・ウォーカー 高橋茅香子訳

メリディアン

わたたちの同時代 北米黒人女性作家選 5

一九八二年五月三十一日 第一刷発行

定価——二一〇〇円 0097-254925-0042

著者——アリス・ウォーカー

訳者——高橋茅香子

発行者——初山有恒

印刷所——共同印刷株式会社

発行所——朝日新聞社

〒104 東京都中央区築地五―三―二 電話〇三(五四五)〇一三一
編集・図書編集室 販売・出版販売部 振替・東京〇一―七三〇
Printed in Japan

アリス・ウォーカー

一九四四年ジョージア州生まれ。スベルマ
ン・カレッジとサラ・ローレンス大卒。詩人、
小説家。Ms.などの雑誌に寄稿。作品は詩集
に *Revolutionary Petunias and Other
Poems*, 小説に *The Third Life of
Grange Copeland* などがある。

高橋茅香子(たかはし ちかこ)

一九三八年大連生まれ。六二年東京外国語大
学卒業。六二年より朝日新聞東京本社企画部
勤務。訳書にモニカ・ディケンズ『なんとか
しなくちゃ』(晶文社)がある。

目次

メリディアン

3

黒い女たちの自画像 ヤマグチ フミコ

衰弱そして再生 藤本和子

287

277

装幀 平野甲賀
カバー画 エマ・エイモス

女たちの同時代

北米黒人女性作家選
編者・藤本和子

2014

ストートン・リンドとマリナム・Lに

そして讀えられることのないジョン・ルイスに

この本を執筆している間、ご支援下さったラドクリフ・インスティテュート、マクドウェル・コロニー、ヤッド・コーポレーションにお礼申し上げます。またメル・レヴィンサルとレベッカ・レヴィンサルにも感謝を捧げます。

メリディアン／目次

メリディアン

最後の訪問 12

野生の子 38

仮の宿 41

何か盗んだのかい？ 56

黄金 60

インディアンと恍惚 62

ペルシア胡桃 71

幸福な母親 82

雲たち 89

善の達成 92

目覚め 95

闘いに疲れて 99

積雪 112

勝利の王子 119

繰り返される夢 143

トルーマン・ヘルド

トルーマンとリン 南部での時 156

ばいたと妻と 159

ニューヨーク・タイムズ 169

訪れ 176

リン 191

トミー・オッツ 193

リン 196

彼を彼自身の人種に返すことについて 209

二人の女 216

リン 222

終末

ついに解き放たれて 230

問い 233

カマール	240
旅回り	252
トレジャー嬢	257
巡礼の旅	264
(贖罪 後日、同じ人生の歩みのなかで)	269
清算	271
放免	274

どれほど多くのことが終わったのか、そのとき、わたしは知らなかった。振り返ってみて……今でもはつきり目に浮かぶのは、虐殺された女たちや子供たちが、曲がりくねった峡谷沿いに積み重ねられたり、散らばったりしていた光景だ。まだ若かったわたしの目が見たそのままの光景が、今でもはつきりと思ひ出される。その血にまみれた泥の中で、ほかにも何かが死んでいったことを、吹雪の中に埋められていったことを、わたしは知っている。そこで死んだのは人々のひとつの夢だ。それは美しい夢だった……人々が愛し、いつくしんでいたものが壊され、散りぢりになってしまった。——もはや心のよりどころはなくなった。聖なる木も斃されてしまった。

——ブラック・エルク「ブラック・エルクは語る」

me·rid i·an, 名詞. [*L. meridianus meridies* 真昼, 南に由来し, 真昼もしくは南に関する. (*medius middle + diea day*)]

1. 天体がその軌道で到達する最頂点.
2. (a) 力, 幸運, 成功などの絶頂; 天頂; 頂点. (b) 健康, 気力などの盛りと見なされる人生の最盛期; 全盛期.
3. 正午. [廃]
4. 天文学で, 天の両極と任意の地点における天頂と天底を通る天球上の大仮想円.
天の赤道と直角に交わるもの.
5. 地理で, (a) 地球の両極と地球上の任意の一点を通る地球の表面上の大円. (b) 両極を通る大円の半分, (c) 地球儀もしくは地図上を南北に走る任意の経線. 上記の大円もしくは半円と同じ.
6. (a) 特殊の性格をもつ場所もしくは状態.
(b) 特殊の性格.
7. 地球儀を支え, それを回転可能にしている目盛のついた真鍮の輪.
first meridian (Prime meridian): 本初子午線. *magnetic meridian*: 極めて正確に設定された子午線で, 二次子午線あるいは標準子午線を作り出す可能性をもつ.

me·rid i·an, 形容詞.

1. 正午の, 正午に, あるいは特に, 正午の太陽の位置の, もしくはその力の.
2. 任意の天体の日々に軌道で最頂点の, あるいは最頂点を通る.
3. 子午線の, あるいは子午線に沿って.
4. 幸運, 成功, 力などの絶頂点の, あるいは絶頂点で.
5. 南の. [まれ]

メリディアン

トルーマン・ヘルドが小さな町チコケマへとゆっくりと車を乗り入れてガソリン・スタンドで停めたとき、そこで働いている黒人はふたりとも昼休みの最中で、車を降りたトルーマンを見ても、飲みかけのコカコーラのびんをちよつとあげてあいさつしただけだった。ふたりは日ざしを避けてガレージの中で二つの箱に腰かけ、のんびりとした低い声で話していた。トルーマンは棒キャンディーを食べながら、スタンドの事務所から仏頂面をして出てきた白人の少年がガソリンをいれるのを見張った。ニューヨークから一晩中走りつづけてきた緑色のボルボはほこりと油で汚れきっている。フロント・グリルの銀色の格子が、ペしゃんこにつぶれた虫でまっ黒だ。

「どこかで洗車ができないかな？」 ガレージに向かって歩きながらトルーマンはたずねた。

「ああ」 男のひとりが答えて、ゆっくりと立ち上がると、コーラの最後のひと口を喉に流しこんだ。そして曲がった人差し指をあげてそちらの方向を差そうとすると、ぼろぼろのジーンズの少年がもろにぶつかってきて、はずみで男はもう少しで倒れそうになった。

「なんだよ」 男はようやくと踏みこたえた。「火事か？」

「ちがうよ」 少年は息をはずませていった。「あの帽子かぶった女がさ、戦車をにらみつけているんだよ！」

「なんてこった」 ドーナツの残り半分を口にいかけていたもうひとりの男がいった。ふたりの男は急いでオレンジ色の制服に手をこすりつけると、ガレージにかかっている時計をちらっと見上げた。「まだ時間があるぞ」 ドーナツを持った方がいう。

「そうだな」 もうひとりが答えた。

「いったい何事だ？」とトルーマンはきいた。「どこへ行くんだい？」

ニュースをもってきた少年は、いつの間にかドーナツを半分せしめてすごい勢いでそれを食べながら、片目でびんの中にまだ残っているコーラを盗み見していた。

「町に陸軍のでっかい古戦車があるんだ」と少年は、いっばいにほうばったドーナツで口をもぐもぐさせていった。「それでさ、帽子の女が、まるで戦車なんか知っちゃいないって風にしてるんで、やつらが戦車を女に向けてぶっぱなそうとしてるのさ」

少年はドーナツを平らげ、コーラも飲みほしてしまった。「おれも行かなきゃ」そして、もうとっくに角を曲がって見えなくなってしまうているガソリン・スタンドのふたりの男たちの後を追って走り出した。

チコケマの町には本当に戦車があった。六〇年代に買ったもので、そのころ、町の白人たちは「よそ者の扇動者たち」——つまり万人平等の権利は黒人にも及ぶべきだと考える黒人共同体（コミュニティ）のメンバーたち——の攻撃にさらされているのを感じとっていた。白く塗られ、リボン（赤、白、それにもちろん青）で飾られた戦車が、広場に置かれた。傍らには北に向かつて立っている南軍兵士の像が据えられているが、その右足は戦車を運んできたときにぶつけられて、欠けたままになってしまった。

トルーマンは真っ先に、広場をかこむ路上にはぎっちゃん人垣ができていながら、だれも口をきいて

いないことに気がついた。あたりはしんと静まりかえり、まるでだれも息もしていないのではないかと思うほどで、トルーマンの足音だけが歩道に響いた。このただならぬ静けさをのぞけば、そこは、南部のどこの田舎町にもあるような、ただの広場だった。強い日差しであちこちがまだらになった芝生が煉瓦づくりの裁判所をぐるりと取り囲み、高くそびえ立った松や泰山木の木々がさらにそれを縁どっている。コンクリートの歩道は熱く灼け、ごみひとつ落ちていない。たまにだれかが丸めて捨てたチューインガムが靴の底にくっつくぐらいのものだ。

広場のトルーマンがいま立っている側にある店は、どこもさびれていて、煙草とかオールド・ミルウォーキー・ビールなどの看板は熱い日差しでとつくの昔にはげてしまっている。向かい側の店の方は、ずっとました。ウインドーのガラスはびかびかで、その後ろに新しい洋服を着せられたマネキンが見えるし、窓ぎわには赤い鳳仙花がいっぱい咲いている。

「何事だい？」トルーマンは、横幅の広いほうきにまるで鳥のように注意深く静かに身をもたせかけている老人に近づいてたずねた。

老掃除夫は、警戒するような目つきでトルーマンをちらつと見ると、ほうきをしっかりと握り、それにいつそう深く寄りかかった。「ああ、子供らが、死んでる女を見にはいりたがってるのさ、ほら、あそこのトレイラーのみいら女だよ。こちとらの番がきて見にいかれるのは木曜日だったのにさ」

「あんたたちの番だって？」

「ああ」

「しかし公民権運動ですっかり変わったじゃないか！」

「権利なんてものは、素通りだけさね」掃除夫はまるでわざとトルーマンの反論を誘うように、不満気に鼻を鳴らした。「あんたはこのあたりのひとじゃないね。この土地の者だったら、町はずれ